

議 事 録

会議名称	第2回小松市未来型図書館等複合施設基本計画策定アドバイザリーボード
日 時	令和6年8月6日(火) 16時～18時
場 所	小松市役所4階会議室、オンライン
出席者	(敬称略・順不同) アドバイザー3名 野末 俊比古氏(青山学院大学教育人間科学部長・教授) ※オンライン参加 杓谷 茂樹氏(公立小松大学国際文化交流学部国際文化交流学科長・教授) 安岡 美佳氏(デンマークロスキレ大学准教授)※オンライン参加 吉田 良晴氏(九九谷代表)※欠席(後日、個別に会議予定) 事務局(市長公室未来型図書館づくり推進チーム) 横山、高橋、竹内、中山 支援業務受託者(アカデミック・リソース・ガイド株式会社、株式会社日本総合研究所(以下「JV」)) 李、西谷、江頭 ※オンライン参加
次 第	1. 第1回アドバイザリーボードの振り返り 2. 第1回リビングラボ開催速報 3. 基本計画の策定について 4. 第2回リビングラボ企画案について
配布資料	【資料1】第1回アドバイザリーボードの振り返り 【資料2】第1回リビングラボ開催速報 【資料3】基本計画の策定について 【資料4】第2回リビングラボ企画案について 【資料5】第1回リビングラボ(オンライン開催)について

＜会議内容は下記のとおり＞

1. 議事

(1) 第1回アドバイザリーボードの振り返り

資料1に基づき、J Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

J V 李	前回のアドバイザリーボードで各アドバイザーから質問いただいた内容を議事録に追記する形で資料にまとめている。いただいた意見はリビングラボや基本計画作成に積極的に反映していく。
事務局 中山	リビングラボについては、開催方法や開催時間なども工夫していくため、8月22日（木）の夜にオンライン版を開催するほか、10月以降には、中学校や高校に出向き、ティーンズ版の開催にも取り組んでいく。ティーンズ版の開催については、新聞に掲載されたこともあり、保護者の方などから、子どもたちの声を基本計画に盛り込んでいくことについて期待する声も寄せられており、あらゆる世代の想いを大切にしながら基本計画策定を目指していきたい。
事務局 竹内	野末教授にご協力いただき、令和5年度の第5回リビングラボでも使用したリアルタイムアンケートツール「イマキク」を活用し、オンライン掲示板のようなプラットフォームの開設準備を進めている。こういったツールも駆使しながら、市民の皆さんが自由に意見やアイデアを投稿できる環境や仕組みづくりにも取り組んでいきたい。

資料1—2に基づき、J Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

J V 李	前回のアドバイザリーボードで安岡准教授よりご質問のあったリビングラボのショートレクチャーのテーマを決めるに至った経緯を資料にまとめており、未来型図書館のライブラリーとは何かということについて、改めて、図書館の基本機能から検討したものである。
野末氏	主に以下の視点についてショートレクチャーを行った。 ・「読書（メディアの利用）」は「目的としての読書（好きな小説を読むなど）」と「手段としての読書（仕事で使うデータを探すなど）」の大きく2つに分けられる。「読書」や「本を読む」と聞くと、意識しないままに前者または後者に限定したイメージで議論してしまうことがあるので、この2つの視点を整理しておくことで議論しやすくなる。 ・図書館には様々な資源があり、小学校の教室や授業を例に考えると、「教材（情報資源）・教具（物的資源）・教室（空間資源）・教師（人的資源）」の4つの資源に分類できる。この4つを上手く組み合わせることで学びが効

	果的・効率的になり、図書館には、これら4つの資源が揃っており私たちの学びや成長を支えている。 ・ワークショップのテーマ「ライブラリーテーマ」を考えるにあたり、「本」に限らず、四つの資源を上手く組み合わせたテーマ（棚づくり）をイメージすると図書館の可能性や広がりが出てくる。
J V 李	野末教授からあったように、冒頭にレクチャーを行い、ライブラリーテーマを考えるワークに取り組んだ。
安岡氏	資料を事前に確認した。全体的に情報提供や引き込み方に工夫を感じた。図書館は知る場所だと思うが、一方向になりがちだと思う。北欧では情報をインプットするだけでなく、アウトプットする視点も大切にしており、情報の双方向という観点も大事であると思うが、そのような点についても検討しているか。
J V 李	インタラクションや相互作用は非常に大事にしたいと考えている。第1回リビングラボでは、メディアが多様になっていることを入り口に、メディアが紙だけではなく、デジタルや人（ヒューマンライブラリーや聞き書き）という領域にも広がっていることが議題に挙がったグループもあった。相互作用については、メディアの領域の広がりと共に自然に作用すべきか、または図書館としての方向性を明示すべきかについては、今後の検討課題であると捉えている。
野末氏	市民自らが、自分たちの中にあるニーズから自由に発想しながら、棚づくりを行う活動などから交流が生まれると考えており、先日のリビングラボでも感じたところである。未来型図書館においても、市民による棚や展示コーナーづくりなどを通じて、市民同士の交流の中から「知る」という体験が生まれるのではないかと考える。
杓谷氏	生態系という言葉が良いと感じていたところに、安岡准教授の相互作用という話が出たことに非常に繋がりを感じている。情報を使うことが前提だとは思いますが、小学生を見ていると、「知る」こと自体が嬉しく、成長への喜びを感じる。また、「知る」ための「読む」は多様であることを前提としていたと感じた。そうした「場としての図書館」は、関わる人たちが「知る」ことで、図書館や複合施設自体もダイナミックに成長するような場所だと面白いと感じ、非常にワクワクした。
安岡氏	クリエイトしていく部分も発信できるような形で繋がっていく良いと感じた。
安岡氏	「Participatory Museum（参加型博物館）」 https://participatorymuseum.org/ という本を共有したい。単に来館するだけではなく、「参加」によってミュージアムをより使いこなそう！というガイド本。この本でも、初めはアクセスするだけだが、そのうちインタラクションし始め、最終形態としてコミュニティが出来上がるという説明がされており、これまでの説明と類似していると感じた。また、ME（個人）からWE（コミュニティ）に変化していく様子を5段階で示

	しており、個人的な興味から始まり、興味関心が薄れてしまうこともあるが、インタラクションを重ねてネットワーク化していくことで、持続可能性が高まることが示されている。ネットワーク化されることで、人とのつながりや成長を促し、新しいことが始まる。そういったプロセスが図では示されている。
J V 李	テーマ配架自体を市民で検討するという取り組みは東京都瑞穂町や静岡県焼津市等一部の図書館で行われている。こういった事例も参考にしながら小松市ならではの形について検討を重ねていきたい。

(2) 第1回リビングラボ開催速報

資料2に基づき、J Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

J V 李	自治体の施設整備のワークショップとしては非常に多くの参加者に集まっていた。司会を市内の小学生にお願いするなど、小松のオリジナルを感じる会となった。また、市長にも参加いただき、事業への関心の高さが市民にも伝わったのではないかと感じる。野末教授にはコーディネーターとしてレクチャーを行っていただきポイントを示していただいた。ワークショップでは、個人の小さな興味関心をキーワードとして書き出し、グループの中でカテゴリ分けをしながら、最終的には一番大きなライブラリーテーマを検討していった。分析はまだ終わっていないが、速報として各グループで出たアイデアをまとめている。
野末氏	抽象的なやりとりが多かったので、グループでもまとまるのか懸念していたが、時間の制約がある中でうまくまとめ上げていた。出たアイデアを実現するための具体案を考える機会があると良いのではないかと感じた。
杓谷氏	自身が参加したグループでは、図書館を「図書館機能を使いに行く」「目的はないが図書館に行く」という2種類の図書館へ行く理由づけをもとに展開していった。
J V 李	第1回リビングラボには、杓谷教授の授業を履修している学生19名に参加いただき、運営準備からお手伝いいただいた。学生のみなさんにはワークにも積極的に参加いただき、全体の活性化につながったと感じている。学生たちも楽しそうに取り組んでいたことが印象的だった。
安岡氏	まず78名もの参加者が集まることに驚いている。アウトプットも細かく見ていくと非常に面白いと感じた。どのように分析するのも気になる。大切な視点や考え方は市民からも出ていたと感じた。小松を「知る」だけでなく、「発信していくこと」が記載されていることや、「ヒューマンライブラリーとして人に会いに行く」など、これらの参加した人のニーズなどが、うまく可視化できて、フィードバックできるようになると良いと感じた。これから、小松の人たちのための図書館を目指す中、テーマがシビックプライドを刺激するな

	ど、この図書館に来たからこそ出会える体験や情報などを吸い上げて、オリジナリティのある図書館を見出してほしい。
事務局 竹内	リビングラボのラボの部分として、実証実験を今年度も大切にしたいと思っている。第1回リビングラボでは、空間再現ディスプレイの展示を行い、参加者に体験いただいた。「博物館の展示物と本と一緒に見ることができたらいい」など、さまざまな感想があり、次回以降も実証実験を組み込んでいきたい。
J V 李	リビングラボの報告書は正式にまとめ、基本計画にしっかり活かしていきたい。

(3) 基本計画の策定について

【資料3—1】 【資料3—2】に基づき、事務局J Vより説明。

杓谷氏	「知の集積」について、蔵書数については35万冊を想定していると記憶している。蔵書数については、施設機能に博物館も含むとなると、普段市民の目に触れない資料も含まれるのではないかなと思う。博物館資料の点数等も含むことがわかるような記載があると良いのではないかな。博物館では展示されているもの以外の収蔵品も多いと思うが、知の集積として、博物館資料も一緒に捉えてほしい。
杓谷氏	博物館も箱の中に展示物があるという時代でもないと感じる。情報も紙に印刷されているものに限らないということと同じことが博物館の資料にも起こるのではないかな。色々な人と話してみると、博物館と図書館が融合している事例が非常に少ないということに気づいたほか、司書と学芸員との連携などの課題もあるように思う。現在は、未来型図書館づくりのためにリビングラボを実施しているが、本来は、完成後の運営をリビングラボが実施していくことが重要ではないかな。司書と学芸員との間を仲介するのがリビングラボではないかなと感じた。
J V 李	図書館機能と博物館機能がどのように重なっていくのかが課題であり、全国的にも登録博物館との複合施設の事例は非常に少ない。登録博物館と複合施設の一体的な事例もあるが、連携や融合に課題が残る。ご指摘の通り、学芸員と司書連携は課題だと感じている。また、リビングラボは整備が目的ではなく、地域の課題に取り組み続けることが大切であり、そういった橋渡しをぜひ目指したい。リビングラボでの展開について、安岡准教授からご意見があれば伺いたい。
安岡氏	リビングラボは継続することが大切だと考えている。いかにリビングラボが、日常生活に組み込まれ、循環が生まれていくかが重要。現在は、段階としてワークショップに紐づけて、リビングラボの下地を整えている段階と捉えている。参加者のみなさんが今後、コンスタントに関わり続けたいと思える仕組が図書館やエリア全体に埋め込まれて行く必要があるのではないかな。こうしたことを考えながら基本計画を設計していくことが重要だと考える。

事務局 横山	アドバイザーのみなさんから重要なテーマをいただいた。小松らしさを出すには、図書館と博物館が真に融合できるかにかかっていると感じている。例えば、蔵書の収集や選定も、図書館だけでなく、博物館の学芸員の視点も必要であり、施設全体の運営面から考えることが大事である。レファレンスも、既に博物館で担っている部分もある。また、人や地域をつなぐレフェラルサービスも非常に大事だと思っているが、こうしたところで小松らしい、新しい形を示していけるのではないかな。 「地域情報資源」の観点については、現在、図書館エディターのみなさんに地域コンテンツの編集や発信を担う活動を行っていただいている。図書館エディターや市民のみなさんにも選書等に入ってきていただけると、さらに開かれた図書館になっていくと感じている。
野末氏	目次構成案は検討項目として良いと思う。中身についてどのように検討していくのかが重要であり、事例に捉われることなく、市の考え方なども踏まえながら検討を進めていきたい。
野末氏	杓谷教授の発言の通り、リビングラボが強く出てきても良いのではないかなという意見には同意である。市民が主体となり自治体がサポートするという形で、主従関係が逆転することで、小松市オリジナルのスタイルとなるのではないかな。レファレンスについても、市民同士が担っていくという活動があっても良いのではないかなと感じ、そういった議論もできると面白い。市民が、例えば客員図書館員のような肩書きや責任と裁量を持って活動に取り組めると面白いのではないかな。
J V 李	リビングラボでも、「あの人に聞いてみよう」という話は出ていたと思うので、市民によるレファレンスなどについては検討を続けたい。事例だけではなく、小松市としての仮説づくりを基本計画の中で進めていきたい。
事務局 高橋	今回、目次構成案を出した意図としては、市民のみなさんにも進捗を発信する必要があると考えている。ライブラリーテーマを検討した結果を基本計画にも反映していくことも大切であり、市としては、9月、12月、3月の議会報告と合わせて議論の経過や基本計画策定に向けた進捗状況について積極的に示していきたい。
J V 李	図書館機能を踏まえながら9月の議会までに必要な項目をまとめたい。アドバイザーの皆さんにもコメントいただきブラッシュアップをしていきたい。
事務局 高橋	事業計画が大切なステップである。引き続き、アドバイザーのみなさんからのご助言をいただきながら進めていきたい。

(4) 第2回リビングラボ企画案について

【資料4】に基づき、事務局より説明。

杓谷氏	博物館で開催されている特別展示について、未来型図書館においても開催できると良いと思う。子ども学芸員や市民学芸員などの肩書きを持った市民が参画し、開館後も関わり続けることができる仕組みづくりを検討したい。
野末氏	グループワークについては、グループを超えたやりとりが発生するという理解で良いか。
事務局 中山	各グループの中で検討し、最後に全体共有という流れを想定していたが、野末教授のご発言のとおり、グループを超えてお互いに検討した内容について確認する方法が良いと感じる。
野末氏	これまでのリビングラボにおいて、他のグループを見にいき、コメントをするというプロセスもあったので、そういった形でも良いのではないか。
J V 李	全グループではなく、1グループだけを見るのであれば、時間的にも可能である。
安岡氏	トピックス自体は良いのではないか。当事者意識を持ってもらうことは良いと思う。アイデアを持っている人がアクションできる受け皿が、仕組みとしてあると良いなと感じ、北欧にはそういう仕組みがあり市民参加につながっている。少額だが活動資金などのサポートもあるため、活動に繋がるなど NPO づくりの枠組みがある。実現可能なアイデアが実際に動いていけば良いなと感じた。
J V 李	リビングラボの継続性が大切だという話が出ている通り、リビングラボを継続した結果、主体的に部活動が生まれた自治体もある。部活動ごとに能動性に差はあるが、コミュニティが出来上がると仕組みについての検討が生まれ、そういった展開についても現段階から検討していきたい。
杓谷氏	今回の博物館機能を中心とした機能の融合・連携を検討するワークは、第3回リビングラボの建築空間を検討していくうえでも繋がっていく内容であると感じた。
事務局 中山	部活動の話題が挙がったが、現在、子ども司書養成講座を開催し、子ども司書クラブを立ち上げ活動しているが、来年度には子ども学芸員の養成講座もスタートさせたいと考えている。図書館機能や博物館機能の融合・連携を目指す中で、人材育成なども通じて、融合・連携を図った活動の展開を目指していきたい。

【資料5】に基づき、事務局より説明。

事務局 中山	今年度は、初のリビングラボのオンライン開催を予定しており、開催終了後に改めて報告したい。
-----------	--

終わりに、各アドバイザーより一言コメントをいただいた。

野末氏	基本計画策定に向けて検討事項が多いが、楽しく取り組んでいけたらと思っている。市民の皆さんにも引き続き、主体的に参画していただけるような雰囲気づくりなどに努めてほしい。
杓谷氏	最初は官学連携として、授業の一環として学生と共にリビングラボに参加していたが、博物館機能の検討や図書館機能などとの融合・連携というキーワードを通じてアドバイザリーボードにも参加しており、引き続き皆さんと一緒に検討を重ねていきたい。また、リビングラボの力を感じており、ぜひこのチカラを運営に活かしたい。
安岡氏	遠隔からできることを模索したい。日本の外にいるからこそ見えることや、小松の特徴やデジタルの視点等をこれからも投げていきたいと思う。また、リビングラボの手引き (http://yasuoka.dk/livinglab/) を共有するので是非活用してほしい。また、リビングラボについてのエッセーの依頼をいただく機会が増えている。小松市についても、さまざまな場所で紹介をしていきたい。

次回、第3回アドバイザリーボードは9月に開催予定。

以上